

二つの大冊

ここしばらく大きな本が出ないと思っていたら続けて二つの大作ができました。ひとつは皆様良くご存知の白水隆先生をしのぶ‘白水隆アルバム（日本蝶界の回想録）’です。白水隆先生は20世紀～21世紀を通じ学者、アマチュアを問わず蝶愛好者を同志と呼ばれ、自ら多くの知見や図鑑等を世に送るとともに愛好者の架け橋となって指導、啓蒙をおこなってきました。タバコとお酒をこよなく愛しだれかれのわけへだてもなく接し、気軽に各同好会や酒席に顔をだしその温和な笑顔と豪快な飲みっぷりで皆にしたしましておりました。

長い事、九州大学農学部昆虫学教室にあつて若手の指導、昆虫学の普及に努められ、1991年には勲二等瑞宝賞を授与され、2004. 4. 2. 86歳でこの世を去りました。もっともっとあの笑顔を見たかったです。誠に残念です。没後、追悼書を含め種々の書が出版されておりますが、この書は他にない画像主体で先生の軌跡を追っているのが特徴です。

生い立ち交友関係の写真、著作の書き込み原稿、書簡集、略年譜、物故日本の蝶研究者の内容で纏められ、多くの学者、アマチュア等が出てきます（365P）勿論多摩虫会員もいくつかに見られます。

白水隆文庫刊行会（発行人、西山保典）となっておりますが、非常に残念ながら非売品であり473部しか作られておりません。前もって予約納金した人しか手にしておりません。希少価値というのがありますが、白水先生の生き様？とその人柄や虫屋はこうあるべきと言うことを知っていただくために、もっとできるだけ多くのかたの胸に刻まれるべきものかとも思います。

もうひとつは虫社から9/下旬に発行される小岩屋敏氏による‘世界のゼフィルス大図鑑’です。氏の永年の知見、研究の集大成ともいふべき恐るべき？大図鑑です。マニアチックの最たるもの？と言えないことも無いが本当に世界に誇れる書かと思えます。

51属184種の世界のゼフィルス全種の図示、130種を超えるヤングステージや食草の図示各種の原記載、タイプ産地タイプ標本の所在地、各種解説、11新属の記載等からなり、図版、解説の全2巻で総ページ558Pと言う凄さです。実物を手にした時各ヤングステージの奇異さ、色合い等にきっと皆様も必ず引き込まれることでしょう。

その内容の濃さにもびっくりしますが、値段も¥48300と高額で清水の舞台から飛び降りる気で考えないとなかなか手が出ないでしょう、正直言って家計に響く額です。うーん悩むなー！！

- * 今年の夏は猛暑もさることながら変な夏でした。日本全国一年中をとおして蝶の本当に少ない年でした。春3月の寒の戻りで死亡したヤングステージが多かったのかも知れません。また、寄生の天敵が増えたこともかんがえられますが、夏場の暑さのためゴマ、キベリ、ベニヒ等は10日以上発生が遅れたところが多く、年間をとおして各地だらだら

発生となり余計蝶が少なく見えるように感じたこともあったようです。こんな年は長い過去にもあまり経験したことがありません。只でさえ保護、保護の掛け声とこの趣味に対する風向きもあって自由にネットを振ることが難しくなってきたのに、こんな年は今年一年で勘弁してもらいたいと思っている方も多いのではないのでしょうか？

* メルアド開設、変更

遠藤茂 jr6mw4@bma.biglobe.ne.jp

小山元昭 kykoyama@gmail.com

* 10月、12月の例会は所定の第3火曜日ですが、11月は市役所の催しで全室とられ第3火曜日は不可です。したがって第4火曜日（11/27）となります。くれぐれもお間違いなきよう宜しくお願い申し上げます。

* 新聞紙上より

● 図版に工夫の生物本



左上から時計回りに、形のかわいいルリホコリ（『粘菌』）、飛び出す絵本、拡大撮影したスズメバチの針（『昆虫の雑学事典』）、ミツをためたミツツボアリ（『世界珍虫図鑑』） ©ネイチャー・プロ

精緻な写真 無言の訴え

「昆虫への興味が薄い学校の生徒たちに、何とかして面白さを伝えたい」と、昆虫の阿達直樹さんが執筆した『昆虫の雑学事典』は、あえて書店へ足を運ぶことを勧めない。図版に工夫が凝らされ、飛び出す仕掛けが楽しい充実した生物の本が、うまく網の中に捕まるかもしれない。（待田晋哉）

「昆虫への興味が薄い学校の生徒たちに、何とかして面白さを伝えたい」と、昆虫の阿達直樹さんが執筆した『昆虫の雑学事典』は、あえて書店へ足を運ぶことを勧めない。図版に工夫が凝らされ、飛び出す仕掛けが楽しい充実した生物の本が、うまく網の中に捕まるかもしれない。（待田晋哉）

「昆虫への興味が薄い学校の生徒たちに、何とかして面白さを伝えたい」と、昆虫の阿達直樹さんが執筆した『昆虫の雑学事典』は、あえて書店へ足を運ぶことを勧めない。図版に工夫が凝らされ、飛び出す仕掛けが楽しい充実した生物の本が、うまく網の中に捕まるかもしれない。（待田晋哉）

生ずる地球の大切さを強く訴える。田んぼの水につかり自慢にほおを膨らますトノサマガエル、川を静かに泳ぐメダカたち。内山りゅう『マ、絶滅の恐れがある水辺の生き物たち』（山と溪谷社）は、水田の圃場整備や水路のコンクリート護岸化により、かつて田内のどこにもいた生物が危機に瀕している現状を伝える。

最後に、昨年あたりから子供の間でブームを呼んでいるのが、1966年、米国のシカゴ州生まれの紙の魔術師、07.6.13『ゴロバート・サプタ』の『太古の世界 恐竜時代』は10万部、シヤーク『海の怪獣たち』は3万6000部を刊行する。本を開くと、クヒナガリュウやクロノサウルスなどの大型動物が飛び出してくるのは文句ない迫力だ。版元の大日本絵画による、原画を組み立てる作業は、タイや中国などの工場ですべて手作業で行われる。人が急上昇しても一般書籍のように大量増刷できないのが悩みの種だという。……本を眺めているうち、やっぱり虫捕り網を持って野山を駆け回りたくなった。週末は、書を捨てて野へ出てみよう、かな？



チョウとの出会いは51年前、小学3年の夏休みにさかのぼる。京都市の通学路沿いにあるた川の土手で、カラスアゲハが白い花にとまり、青と緑の羽を休めているのを見つけた。

美しさに息をのみ、無心で採
取網を伸ばした。「手にした時の感動は忘れない。あの日から追いつけています」と笑う。京都の自宅には、約1万4000匹にのぼる標本が、350箱に分けて丁寧に保存されている。青い羽が金属のように輝く

「モルフォ」など世界三大美チョウから、小学6年の時に捕まえたアゲハチョウまで、自ら採取したものが大半を占める。「一番美しいのは生きているチョウ。その瞬間をとどめるには、写真しかありません」と、

写真集や「進化論」まで

07.8.14 読売(月)

【こぼれ話】4年前、ペルーの秘境「1万匹のチョウが舞う谷」を訪れた。12時間かけて徒歩でアンデス山脈を越え、小さな村を拠点にしながら、さらにジャングルを進んだ。帰国後、その村にゲリラの幹部が住んでいたことを知り、「経営者の立場としては、危険な地域なのでもう行けない。本当に残念……」と苦笑する。



村田 泰隆 さん 60

村田製作所会長

日本蝶類学会の理事を務め、日本を代表するチョウの研究者でもある。チョウの進化を記した文献がないことを知り、各国の博物館を6年かけて巡った。そこで約70の化石を分析し、「進化論」を書き上げた。

今の目標は、ジャマイカに生息する希少種、ホメルスアゲハの撮影だ。過去3回の挑戦は、いずれも失敗に終わった。「必ず今度こそ」と楽しみにフランスを披露する表情は、少年時代をうかがわせた。(向野晋)

休日には撮影で野山を駆け巡る。その腕前はプロ級だ。チョウが好む色やにおいを使っておびき寄せ、高速で連写する。180度近い超広角の魚眼レンズを

駆使し、周囲の風景も映し込む独特の作風を確立した。これまで、中国奥地で撮影したオウゴンテングアゲハなどを収めた「飛ぶ宝石―蝶の情景―(集英社)など、3冊の写真集を発行している。撮影に訪れた国は、東南アジア、南米、欧州など、海外出張の機会も含めて40以上にのぼる。

クマゼミ

気温上昇 卵で越冬も

都内で増殖中

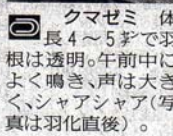
気温上昇のためか、東京でクマゼミが増殖中。この夏、読売ウイークリーと日本自然保護協会、NITレソナントが共同で実施中の参加型プロジェクト「自然しらべ2007 夏休み」の「ぬけがらをさがせ！」に、全国から約1000件の抜け殻の写真と、約6000個の抜け殻の現物が届いた。東京でこれまであまり見られなかったクマゼミの抜け殻が発見されるなど、温暖化などの影響で、セミの生息地図にも変化の兆しが表れている。

調査で判明

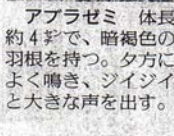
ち込んで都内で放す人がいる。その人為的なものが大きいとみている。だが、これが定着し、繁殖し始めた背景には、都内の気温上昇が大きく関与しているようだ。

「国内の樹木の移動は昔から行われていたのですが、都内にもクマゼミの幼虫が持ち込まれていたはずですが、東京の冬の低温を乗り越えられなかった。近年、クマゼミが都内で繁殖するようになったのは、ヒトアイランなどの植栽と一緒で、幼虫や卵が持ち込まれることで成虫を持つようになったためだろう」と、槐学芸員は解説する。

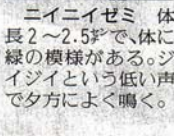
専門家が注目しているのは、西日本から東日本へと分布が拡大していると思われるクマゼミの調査結果。現物の分析を担当する神奈川県・厚木市郷土資料館の槐真史学芸員によると、1995年に環境庁(当時)が調査した時より、都内でクマゼミが見つかる頻度が高くなっているという。



クマゼミ 体羽に大きな透明なアザシヤアザシヤの羽根を持つ。夕方に大きな声を出す。長4〜5センチ、午前中はよく鳴き、午後には羽化直後。



アブラゼミ 体長約4センチで、暗褐色の羽根を持つ。夕方に大きな声を出す。長2〜2.5センチ、体に緑の模様がある。ジイジイという低い声で夕方によく鳴く。



ニイニゼミ 体長2〜2.5センチで、体に緑の模様がある。ジイジイという低い声で夕方によく鳴く。

「国内の樹木の移動は昔から行われていたのですが、都内にもクマゼミの幼虫が持ち込まれていたはずですが、東京の冬の低温を乗り越えられなかった。近年、クマゼミが都内で繁殖するようになったのは、ヒトアイランなどの植栽と一緒で、幼虫や卵が持ち込まれることで成虫を持つようになったためだろう」と、槐学芸員は解説する。